

# 山崎八幡神社奉納



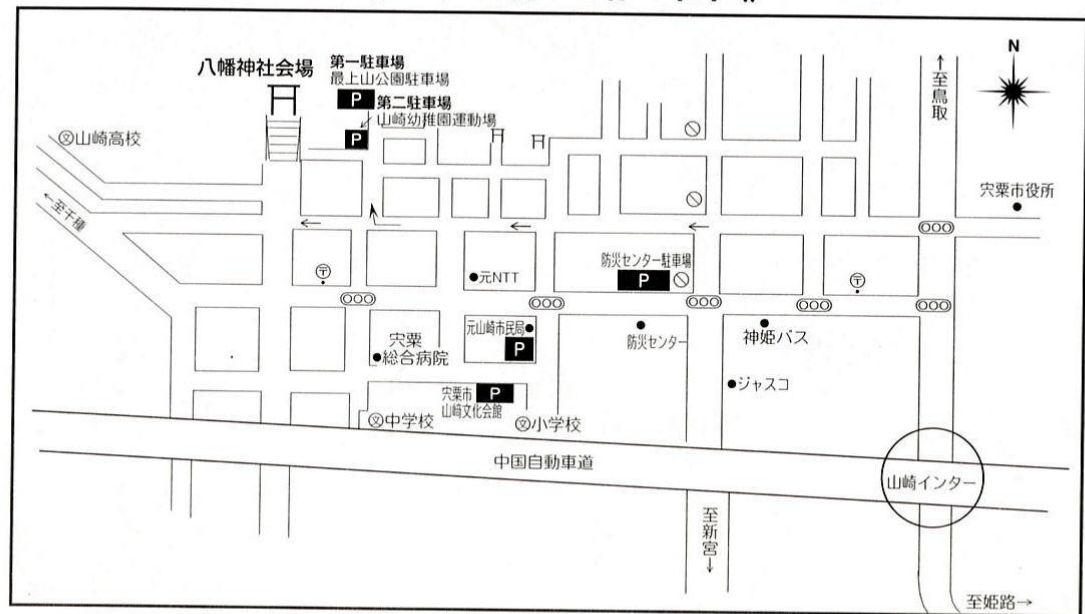
山中陽一先生追善

第十七回

薪

能

## 《会場略図》



と き 平成23年9月3日(土) 【小雨決行】

と ころ 宍粟市山崎町 山崎八幡神社 能舞台  
(台風等の不測の場合は宍粟市山崎文化会館)

第 一 部 宍粟市謡曲同好会 午後1時30分始

第 二 部 薪能奉納 午後5時30分始

主 催 山崎八幡神社薪能奉賛会

後 援 宍粟市・宍粟市山崎文化協会・宍粟市教育委員会・神戸新聞社・宍粟市商工会・  
宍粟市観光協会・龍野ロータリークラブ・山崎ライオンズクラブ・宍粟市  
医師会有志・宍粟市歯科医師会有志・新潮会有志・昭和会有志・平成会有志

協 賛 宍粟市謡曲同好会

**入場無料**

## 山崎八幡神社薪能奉賛会

事務局 宍粟市山崎町山崎386  
(神戸新聞山崎販売所 三谷新聞舗内)  
TEL (0790) 62-2266



## 第十七回 山崎薪能の開催にあたり

昭和五十五年十月四日のプログラムの故壺阪会長のご挨拶に「暑い盛りの八月二日、姫路で第十回の薪能があるというので、見にゆきました。観世元昭師、上田照也師、江崎金治郎師、等々多数の出演者の方々の名演技にすっかり魅了され、改めて能の奥の深さを感じられると同時に、『之が山崎でも出来ればなあ。』と一緒にゆきました山中先生と語り合いました。」とあります。

ここから、山崎薪能が始まりました。爾来、三十一年を経て、第十七回の薪能が開催出来ますことは、故壺阪壽会長、故山中陽一会長をはじめ関係各位の献身的なご尽力によるものであります。

山崎町の高台の森に囲まれ、俗世界の騒音から離れた別天地、山崎八幡神社の境内に立派に美しく再建された、能舞台に、一流の能楽師の諸先生をお迎えして、世界に誇る伝統芸能、能楽を鑑賞出来ることは、誠に素晴らしいことと存じます。

今回は、今日の山崎薪能開催を楽しみにしておられた、山中先生を偲んで追善を込めて挙行させていただきます。

又、この事業に御協賛賜った西播磨の有志の方々に、深甚なる敬意と感謝を捧げて、ご挨拶いたします。



山崎八幡神社薪能奉賛会

会長 安井克典

第一部 穴粟謡曲同好会番組

(午后一時三十分始)

一、山崎ごとも能楽教室

謡曲『高砂』他

二、連吟・山崎集杉会

養老

吉川 宏美 岸本 通哉  
山根 悠子 塚田 清一  
村尾 裕 三谷 恭三  
小泉 啓展 三渡 圭介  
加藤 昭彦

三、連吟・池田掬水会

羽衣

春名 一利 柳田 薫  
大部 満男 安田 武嘉  
山田 雄三 伊野 操治

四、連吟・波賀翠謡会

雲林院

清水 康廣  
松本 繁信  
中田 勇

五、仕舞・鶴崎観和会

道明寺

山國 重代

野宮

宗接久美子  
田中 洋子 鶴崎 和美  
永井由美子

二人静

班女舞アト

岸本 恵子

巻絹

春名 芳子

六、素謡・山崎篠謡会

橋弁慶

子方 原 みち代 進藤ヒデ子  
トモ 上田 隆雄 山崎きよ子  
シテ 原 忠雄 上田 弘子

八、独吟・山崎福王会

山姥

葭谷 驍

七、素謡・秋田泉謡会

梅枝

シテ 蒲田 哲子 中山 昌子  
小瀬七五三男  
大谷 正之  
ワキ 進藤 千秋 中坪 義治  
ワキツレ 篠原 宗平 中村 清子  
中村 明

九、素謡・内山北露会

飛雲

シテ 梶浦 忠志  
ワキ 秋武 春生 共地  
ワキツレ 伊藤 弘之

第二部 薪能奉納

(午後五時三十分始)

演目解説  
修 被 山崎八幡神社宮司  
能奉行舞台改め 薪能奉賛会 会長 根岸敬佑  
安井克典

観世流 能 楽

千<sup>せん</sup>

上田貴弘  
大西礼久

手<sup>じゅ</sup>

江崎敬三

辻 雅之  
久田陽春子

左 鴻雅義

後見 藤谷音彌  
吉井基晴  
地謡 上田彰敏  
今村嘉太郎  
上田昭雄  
水田雄悟  
寺澤幸祐

火入式

挨拶 薪能奉賛会会長 安井克典  
祝辞 宍粟市長 田路勝  
祝辞 兵庫県議会議員 春名哲夫

大蔵流 狂言

寝音曲<sup>ねおんぎよく</sup>

太郎冠者 茂山千五郎 主人 茂山正邦

後見 山下守之

観世流 能 楽  
半 能

杉浦豊彦

融<sup>とわる</sup>

江崎金治郎

舞返  
思立之出  
金剛返

辻 芳昭  
久田舜一郎  
上田 悟  
左 鴻雅義

後見 寺澤幸祐  
上田拓司  
地謡 笠田祐樹  
今村嘉太郎  
水田雄悟  
吉井基晴  
藤谷音彌  
笠田昭雄  
吉井基晴

附祝言

閉会の辞

薪能奉賛会副会長

鶴崎和美

(終了予定 午後八時頃)

※会場内での写真撮影・録画、録音は、堅くお断わりいたします。  
また携帯電話の電源はお切りください。



## お祝いのことば



宮 栗 市 長 田 路 勝

残暑厳しいなかではありますが、時折吹く風に秋を感じるころとなりました。

「第十七回 薪能」が盛大に開催されますこと心よりお祝い申し上げます。由緒ある山崎八幡神社境内の厳肅な空気のなか、歴史ある能舞台で披露される伝統の薪能は、見る者全てを幽玄の世界へと導いてくれます。

かがり火の中に浮かび上がる能の世界は、シテ方やワキ方が演じる歌舞を中心に、謡と囃子、様々な表情に見てとれる能面などが混然一体となつて織りなす独特の世界観があります。それは西洋芸術とは趣の違う日本古来の伝統芸能であることを再認識させてくれます。また、能にはリラクゼーション、癒しの効果もあるのではないかと思います。能は見る者が感じるままに想像力を豊かにして楽しむことができ、言い換えれば楽しみ方は自由であるとも言えます。この自由こそが、現代人が求めるリラクゼーションや癒しに繋がります。能が持つ魅力のひとつといえるでしょう。

今宵、お集まりの皆さまは、山崎薪能から何を感じられるのでしょうか。幽玄や雅の世界にたつぷり身を浸すのもよし、また、それぞれが感じるままに独自の世界を楽しまれるのもよし、いずれにしても初秋の暮、山崎薪能で素晴らしい一時をお過ごしただければと思います。

この様な一時を与えていただきました「山崎八幡神社薪能奉賛会」の皆さま、並びに関係各位には、改めて敬意を表し感謝を申し上げます。

市といたしまして今後とも芸術・文化活動の推進に取り組み、地域文化創造活動の支援に努めてまいります。皆さまの今後更なるご活躍とご発展を願っております。

あらためて「第十七回 薪能」の開催にあたり、お喜びとお祝いを申し上げますとともに、お集まりの皆さまのご健勝とご多幸を祈念いたします。

## お祝いのことば



兵 庫 県 議 会 議 員 春 名 哲 夫

山崎八幡神社薪能も昭和五十五年に第一回が開催されてから三十一年に亘り関係各位の熱意とご尽力により今日まで続けてこられ、今回で十七回を迎えられたことに感謝とお礼を申し上げます。

能は今からおよそ六五〇年前に生まれた現存世界最古の古典演劇であり、しかもただ古いだけでなく、その当時の台本・演出をそのまま伝え、能面・装束までもが、今もなお実際の使用に耐えうると言う特殊な演劇である事を改めて知りました。

多くの演劇は、最初は斬新でも、社会が変わり、道徳・通念が変われば、やがて観客に飽きられ、新しい形態へ変わらざるを得ないという宿命を背負っています。

しかし能は六五〇年もの間、舞台・台本・能面・装束・楽器・演出・作曲・振り付け・セリフの発声・発音まで、昔の面影をさわめて色濃く残り、ないしはそのまま使用できる、という世界でもさわめて珍しい演劇です。

新城健一氏の「能楽とイラン映画」という記事の中で、「能は、観客の側が、舞台から情報を引き出し、自分の中で咀嚼し、味わうことを楽しむ娛樂です。いわば、ゆつくりと、目に映るものを味わいながら、歩いていく。それは、自分の心の中から湧き上がる圧力を楽しむ娛樂と言えらるのではないのでしょうか。湧き上がる圧力の娛樂には、その最後に「うーん……」と唸りながらその世界を堪能し、耽溺することに心地よさがあります。」と紹介されております。

そのように魅力溢れる能は、いまや世界無形遺産に指定され、各地で薪能等のイベントが開催され、多くの人々を楽しませています。

夜を照らすかがり火の中、華麗な装束をまとった演者が勇壮に舞い踊る幽玄の世界に、酔いしれたいと思います。

今後とも、この山崎八幡神社薪能奉賛会がますます発展し、若者たちに後継されていきますことを強く願い、私のお祝いの言葉といたします。



# 演目解説

## 観世流

### 能楽 千手せんじゅ

一の谷の合戦で捕虜となり、鎌倉に送られて狩野介宗茂（かののすけむねもち）〈ワキ〉に預けられていた平重衡（たいらのしげひら）〈ツレ〉が、都へ送り返される前夜、頼朝の指示で千手の前〈シテ〉が宗茂邸へ訪れる。千手は重衡の出家の願いは聞き届けられなかったと告げる。重衡は南都焼き討ちの罪を懺悔することも許されない身の業を嘆く。酒が運ばれて、千手が朗詠をうたい、舞を舞い、出合いの忘れがたさを謡うと、回想に沈んでいた重衡もようやく心を開き、琵琶を弾き始める。千手も合わせて琴を弾き、一夜の興は尽きない。しかし、やがて夜が明けて、二人に別れの時が来る…。



## 大蔵流

### 狂言 寝音曲ねおんぎょく

主人が酒宴の帰りに、たまたま太郎冠者の家の前を通りかかったところ、上手な謡を耳にします。翌日早速、自分の前で謡を謡うように命じます。太郎冠者は、今後たびたび謡わされては困ると考え、まず酒を飲まなければ謡えないと嘘をつきます。どうしても謡を聞きたい主人は酒を飲ませると次は、妻の膝枕でやります。太郎冠者はしぶしぶ謡いはじめますが、寝ているときは謡えるのに起きると声が出なくなるようなふりをします。



ところが酒に酔い調子に乗った太郎冠者はとちがえ、膝枕のときに声を出さず、起こされたときに声を出してしまいます。挙げ句の果てには謡ながら舞いだす始末。太郎冠者の態度には主人に対する反抗というより、甘えている様子がかげえ、ほほえましい主従関係がみられます。

## 観世流

### 能楽

### 融とおる

秋の名月の日。都に上った東国の僧が、六条河原院まで来たところ、ひとりの汐汲みの田子を背負った老人が現れます。六条河原で汐汲みとは、と訝る僧に、老人はこの河原院はかつて河原左大臣といわれた源融（みなもとのとおる）が、陸奥千賀の塩竈の景色をそのまま都に移して作って住んだところだと謂れを語るうちに、月が出てあたりを照らし、趣深い秋の夕景色がふたりの眼前に広がります。

庭の景色を眺めつつ、僧と老人がなおも言葉を交わします。融は、毎日難波から潮を汲ませて、院の庭で塩を焼かせて一生の楽しみとしたが、後を継ぐ人もなく、この河原院は荒れ果ててしまった……。そう嘆く老人を慰めようとしたのか、僧は都の山々の名所を教えてほしいと頼みます。あちこち挙げながら、一緒に仲秋の名月を愛でるうち老人は、つい長話をしたと言って水を汲む様子を見せた後、姿を消してしまいます。

近くに住む者から、河原院と融の大臣（おとど）の物語を聞いた僧は、先ほどの老人が大臣の亡霊だったと思ふ当たり、眠りにつきまします。すると在りし日の姿で融の亡霊が現れ、月光に照らされながら華麗な遊樂に乗って舞うのでした。融は、時を忘れたかのようにこの月夜に



興じていましたが、夜明けとともに、名残惜しい面影を残して、再び月の都へ戻っていききました。

# 演者紹介

シテ方(親世流)

上田 貴弘	上田家当主 重要無形文化財総合指定保持者	神戸在
笠田 稔	重要無形文化財総合指定保持者	神戸在
上田 拓司	重要無形文化財総合指定保持者	神戸在
杉浦 豊彦	重要無形文化財総合指定保持者	京都在
吉井 基晴	重要無形文化財総合指定保持者	神戸在
大西 礼久	重要無形文化財総合指定保持者	大阪在
寺澤 幸祐	重要無形文化財総合指定保持者	大阪在
笠田 昭雄	重要無形文化財総合指定保持者	神戸在
藤谷 音彌	重要無形文化財総合指定保持者	神戸在
水田 雄晤		大阪在
齐藤 信輔		大阪在
今村 嘉太郎		福岡在
上田 宜照		神戸在
上田 彰敏		神戸在
笠田 祐樹		神戸在

ワキ方 福王流

江崎 金治郎	江崎家当主 重要無形文化財総合指定保持者	姫路在
江崎 敬三		姫路在
狂言方 大蔵流		
茂山 千五郎	茂山家当主 重要無形文化財総合指定保持者	京都在
茂山 正邦		京都在
山下 守之		京都在

囃子方

小鼓方 大倉流		
久田 舜一郎	重要無形文化財総合指定保持者	神戸在
久田 陽春子		神戸在
大鼓方 大倉流		
辻 芳昭	重要無形文化財総合指定保持者	大阪在
辻 雅之		大阪在
太鼓方 金春流		
上田 悟	重要無形文化財総合指定保持者	豊中在
笛方 森田流		
左 鴻雅義	重要無形文化財総合指定保持者	大阪在



八幡神社奉納新能の記録

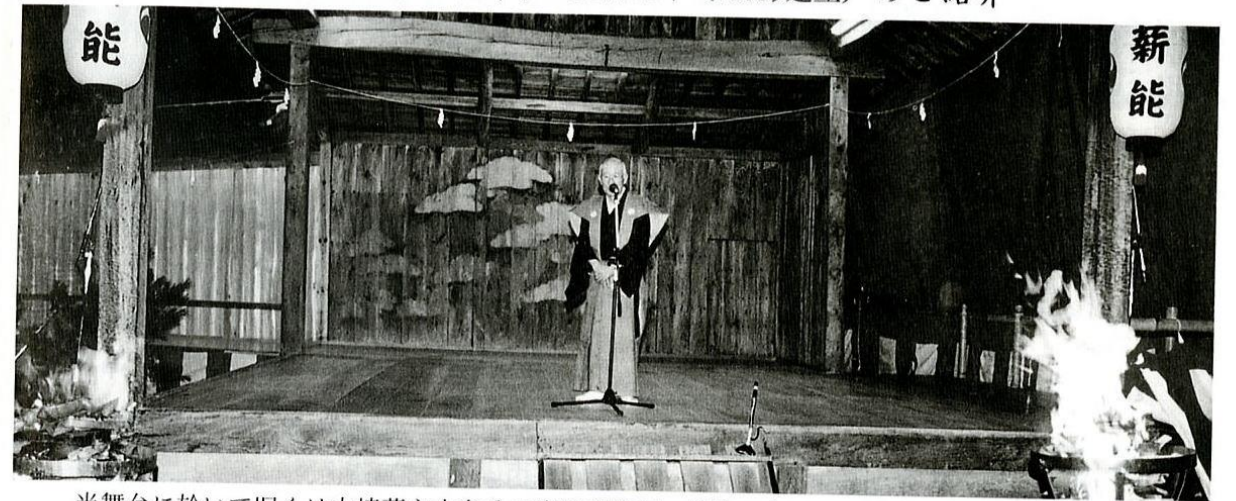
回	年月日	1	2	3	4	5	6
演	昭和 55・10・4	羽衣 上田照也 江崎金治郎	鉢木 上田照也 江崎金治郎	三井寺 浦田保利 江崎正左衛門	弱法師 杉浦元三郎 江崎正左衛門	翁 観世元正 三番叟茂山千五郎 千才観世清和	菊慈童 吉井順一 江崎金治郎
目		柿山伏 茂山千五郎 茂山正義	瓜盗人 茂山正義 茂山あきら	水掛罨 茂山あきら 茂山千五郎	昆布売 茂山忠三郎 伊藤茂	二人袴 茂山千五郎 松本千五郎 木村正雄	呼声 茂山千之丞 茂山あきら 丸石やすし
		土蜘蛛 杉浦元三郎 江崎康雄	紅葉狩 杉浦元三郎 江崎康雄	小鍛冶 大西智久 江崎金治郎	葵上 大西智久 江崎金治郎	狸々乱 大西智久 藤井徳三 江崎金治郎	石橋 上田拓三 藤井徳三 中村彌三郎

12	11	10	9	8	7
13・9・1	11・9・4	9・9・6	7・9・2	5・9・11	3・9・21
巻絹 観世流 笠田昭雄 上田英基 和田基	高砂 観世流 杉浦豊彦 江崎敬三	安宅 観世流 大西智久 江崎金治郎	吉野天人 観世流 坂口信男 江崎金治郎	鶴亀 観世流 井上嘉久 指吸雅之助	経正 観世流 大西智久 指吸雅之助
寝音曲 狂言 茂山千五郎 茂山千作	萩大名 狂言 茂山千五郎 松本千五郎 松本薫	素袍落 狂言 茂山千五郎 茂山七三郎 茂山作	蝸牛 狂言 善竹忠重 高井秀規 阿草一徳	口真似 狂言 茂山真吾 丸石やすし 木村正雄	瓜盗人 狂言 茂山正義 綱谷正美
俊寛 観世流 武富康之 上田拓司 大槻文蔵 江崎金治郎	井筒 観世流 大槻文蔵 江崎金治郎	岩船 観世流 上田貴弘 江崎敬三	野守 観世流 波多野晋 中村彌三郎	土蜘蛛 観世流 藤井徳三 江崎金治郎	安達原 観世流 藤井徳三 江崎金治郎



16	15	14	13
21 ・ 9 ・ 5	19 ・ 9 ・ 1	17 ・ 9 ・ 3	15 ・ 9 ・ 6
杜 <small>観世流</small>  若  江大 崎西 金礼 治久 郎	西 <small>観世流</small> 王  母  江井 崎上 金裕 治久 郎	張 <small>観世流</small>  良  江藤 崎井 敬徳 三三	藤 <small>観世流</small>  戸  江杉 崎浦 金元 治三 郎
魚 <small>狂言</small> 説 経  茂茂 山山 千千 三五 郎郎	伯 <small>狂言</small> 母 ヶ 酒  茂茂 山山 七千 五五 三三 郎郎	貰 <small>狂言</small>  聳  茂茂 山山 千千 作五 郎郎	伯 <small>狂言</small> 母 ヶ 酒  茂茂 山山 千千 吉五 郎郎
雷 <small>観世流</small>  電  江杉 崎浦 敬豊 三彦	正 <small>観世流</small>  尊  江大 崎西 敬智 三久	船 <small>観世流</small> 弁 慶  江杉 崎浦 金豊 治彦 郎	殺 <small>観世流</small> 生 石  是杉 川浦 正豊 彦彦





当舞台に於いて旧くは山崎藩主本多公の奉納新能又、昭和55年より平成19年にかけて奉賛会による新能が15回にわたり開催されました。

300年余の風雪にたえて尚建立時のたたずまいを十分にしのばれる長い歴史をもった由緒ある舞台でしたが、老朽化が著しく、平成19年に大改修工事を施した結果、新装なった舞台は入母屋造り、3間四方の本舞台に後座・地謡座・橋掛りを備え、鏡の間を兼ねた約18坪の楽屋を併設するものです。

【お知らせ】

山崎八幡神社新能奉賛会を支える宍粟市謡曲同好会では、謡曲・仕舞の稽古を各社中で行なっております。稽古をご希望の方はご連絡下さい。初心者大歓迎。見学だけでも結構です。

連絡先

秋田泉謡会	大谷 正之	七二〇一五八
池田掬水会	伊野 操治	六二一六〇〇
内山北露会	内山 正作	七四一〇〇三
鶴崎観和会	鶴崎 和美	六二一〇一四七
波賀翠謡会	松本 繁信	七五二四九三
山崎集杉会	塚田 清一	六二一〇〇六一
山崎篠謡会	原 忠雄	六二二八七九
山崎福王会	葎谷 驍	六二二七四六

(五十音順)

ご協賛者ご芳名

宍粟市山崎文化協会様	栗山 章様
宍粟市商工会様	石野 哲男様
龍野ロータリークラブ様	伊野 操治様
山崎ライオンズクラブ様	樽岡 敬祐様
鹿島建設株式会社様	大成 みちよ様
兵庫県神社庁宍粟支部様	(株)竹川鉄工所・竹川光郎様
江崎福王会様	中坪 義治様
姫路新能奉賛会様	大谷 正之様
新宮福王会様	進藤 千秋様
藤井慧乗様	篠原 宗平様
安井登記測量事務所様	長田 正武様
庄清様	安井 擴様

能 薪 祝

※八幡神社奉納の第十七回新能の開催に当りまして、いつもながら格別の御理解、御協力を賜わり、厚く御礼申し上げます。なお、折角の御厚意にも拘らず、日程等の都合もあり、十分な打合せもできません、広告記事に不備が多々ある事と存じます。また、編集後に戴いた分が掲載洩れになっていることもあります。この点悪しからずお許しのほどお願い申し上げます。